

高等学校新入生に対するグループ体験プログラムの試み

曾山和彦

(秋田県教育庁特別支援教育課)

キーワード ; 高等学校新入生、構成的グループ・エンカウンター、グループ体験プログラム

【目的】

文部科学省(2005)によれば、高等学校に進学する生徒は97.6%の過去最高数値を示しているが、一方で中退率は2.1%を記録し、特に、全日制、定時制共に第1学年の中退率が高いということ、そして、中退理由として学校生活や学業への不適応が全体の4割を占めるという結果が示されている。植村(2003)は、高等学校入学時の学校適応感について時期による比較検討を行い、4月、7月の適応感が12月時点よりも高いことから、高校生は、入学後できるだけ早い時期に友人関係を構築することにより、学校適応感が増すのではないかと述べている。また、吉原・藤生(2005)は、高校生の学校生活不適応状態について、原因を学校ストレス、特に対人ストレスの問題ではないかと指摘し、対策として親密性を高める友人関係づくりの必要性を述べている。

本研究では、これらの知見から、高等学校新入生を対象に、友人関係づくりを目的とするグループ体験プログラムについて検討する。プログラムには、新しい人間関係づくりやリレーション形成の技法である構成的グループ・エンカウンター(structured group encounter; 以下SGEと表記する)のエクササイズを取り入れ、その効果について検討する。

【方法】

1. 対象者

A女子高等学校(以下、A校)1年生7クラス280名。A校は、中核市であるB市の住宅街に位置する進学校である。

2. 実施時期・場所

本プログラムは、200X年4月、新入生オリエンテーション活動の一つに位置づけ、全体を2班に分けて各1時間行った。本研究者がリーダーとなり、その他に5名のA校教師がサブリーダーとして活動に参加した。活動はC県青少年交流センター体育館にて行った。

3. 実施プログラム

本プログラムの内容は、國分(1999)の提案したエクササイズ及び武蔵・河村(2004)によるプログラムを参考にして、集団内の緊張や不安を軽減するエクササイズ、小集団におけるメンバー間のかかわりを楽しむエクササイズ、メンバー間の信頼を体験するエクササイズ、の3本の柱で構成した(Table 1)。また、本プログラムは、活動形態として4人組の小集団

を「ホームグループ」として位置づけ、グループメンバーを固定してエクササイズに取り組むようにした。

4. 手続き

プログラム実施後、対象者に対して、友人関係づくりについて「うまくいったかどうか」を問う2件法の質問及びエンカウンターを体験した後の感想を自由記述形式で記入してもらった。回答があった236名のデータ(回収率84.3%)を分析対象とした。

【結果】

1. 2件法分析

「友人関係づくりはうまくいった」という回答は229人(97%)、「友人関係づくりはうまくいかなかった」という回答は4人(1.7%)、記入なしは3人(1.3%)であった。うまくいかなかったと回答した生徒はその理由として、「もっと積極的に話せばよかった」、「知らない人であまり話せなかった」等を理由として挙げている。

2. 自由記述分析

自由記述は、内容のまとめりごとに、「内容満足度」、「緊張・不安軽減」、「友人関係づくり」、「信頼体験」、「その他」の5項目に整理した。これらの結果はTable 2に記した。内容満足度に関する記述は56.4%であり、「楽しかった。ためになった」等、活動そのものを積極的に評価する記述が多かった。緊張・不安軽減に関する記述は6.8%であり、「初めは友達ができるのか不安もあったけれど、実際たくさんの人と友達になれて本当によかった」等、生徒の安堵感が伝わってくるような記述が示された。友人関係づくりに関する記述は75.4%であり、「初めて会った人とこんなに楽しくできたのは初めて」等、本プログラム所期の目的を達成したことを示唆する記述が多く見られた。信頼体験に関する記述は25.8%であり、「相手を100%信用することができ、友情が深まった」等、相手を信頼することの大切さにふれる記述が示された。その他に関する記述は11.9%であり、「友達はこんな小さなきっかけでできるものだと実感した」等、関係づくりにおける「きっかけ」の大切さにふれる記述が示された。

【考察】

本研究の結果から、高等学校入学直後にSGEを取り入れたグループ体験プログラムを実施することは、新たな友人関係づくりのために有効であることが示唆

された。武蔵・河村（2004）のプログラムは、ペアづくりとそのペアを基本として構成された小集団での活動へと展開するが、本プログラムでは初めに小集団（ホームグループ）を構成し、そのメンバー間でのペア活動を展開した。本研究の対象は、高等学校入学直後の生徒であることから、友人関係の発達段階はチャムグループ相当の生徒が多いと考えられる。チャムグループは仲間への強い同調性が特徴である。それ故、本研究のプログラムは、「このメンバーが仲間である」という意識で活動に取り組めるよう、小集団のメンバーを固定して行った。このように、発達段階を考慮したプログラム展開により、「4人ともとても仲よくなったので絶対これからも声をかけ合ってもっと仲よくなりたい」等の感想が示されたのではないと思われる。

今後の課題としては、植村（2003）の「高等学校においては女子が男子に比べて親和動機が強く、より仲間志向的である」という知見を受け、男子校、共学校

における本プログラムの効果検証を挙げたい。

【参考・引用文献】

國分康孝．1999．エンカウンターで学級が変わるパート3 中学校編 図書文化
 文部科学省．2005．生徒指導上の諸問題の現状について．文部科学省初等中等教育局児童生徒課
 武蔵由佳、河村茂雄．2004．構成的グループ・エンカウンタープログラムの展開に関する一考察．カウンセリング研究第37巻第2号．115-123
 植村善太郎．2003．中高一貫校への外部入学者の対人関係と学校適応感～ある国立大学附属高校における事例的検討～．カウンセリング研究第36巻第1号、57-67
 吉原寛、藤生英行．2005．対人関係のあり方と学校ストレス、ストレス反応との関係．カウンセリング研究第38巻第2号、128-140

Table 1 グループ体験プログラムの内容

活動形態	エクササイズ	<ねらい>・内容
集団全体 (140人)	ジャンケン列車	<緊張・不安軽減>・出会う人とジャンケンをして、負けた人は勝った人の肩に手を乗せ、電車の形に連なっていく。*グルーピング(4人組づくり)を兼ねる。
小集団 (4人)	パースデーライン	<緊張・不安軽減>・小集団(4人)内で、誕生日順に非言語で円状に並ぶ。
*ホームグループ	ネームゲーム	<メンバー間のかかわり>上記の並びで、誕生日の一番早い人が最初に名前を言う。次の人は、「 <u> </u> さんの隣の <u> </u> です」と名前を続けていく。一巡したら、次は、名前プラス好きな食べ物を加え、「 <u> </u> が好きな <u> </u> です」と言い、同様に続けていく。
	ゴジラとゴリラ	<メンバー間のかかわり>・2人組で向き合って立ち、前に両手を伸ばしてお互いの手のひらを挟むようにする。「ゴジラ」、「ゴリラ」の役割を決め、リーダーが呼んだ役割の方は、相手の手のひらを挟む。呼ばれない役割の方は両手を挙げて逃げてよい。
	トラストウォーク	<信頼体験>・2人組になり、一人が目をつぶり、一人が体育館内をリードする。非言語で、役割交代して行う。

Table 2 生徒自由記述の結果（一部抜粋）

1. 内容満足度について（56.4%）
 (例) 楽しかった。とてもためになった / みんなと仲よく楽しむことができた / 話したことがない人と一緒にゲームができて楽しかった / クラス関係なくみんなで楽しむことができた / ありがとう、グループエンカウンター！、等
2. 緊張・不安軽減について（6.8%）
 (例) 初めは友達ができるのか不安もあったけれど、実際たくさんの人と友達になれて本当によかった / 他のクラスの友達が何人かできたので来年のクラス替えの心配が和らいだ / 久しぶりに大きな声で笑え、少し緊張がほぐれた、等
3. 友人関係づくりについて（75.4%）
 (例) 初めて会った人とこんなに楽しくできたのは初めて / 4人ともとても仲よくなったので絶対これからも声をかけ合ってもっと仲よくなりたい / ここでできた友達を大切にしたい / 今までよりもっと友情を深めることができた、等
4. 信頼体験（トラストウォーク）について（25.8%）
 (例) 相手を100%信用することができ、友情が深まった / 相手を信頼することで仲間ができた / マジで友達を信頼でき、友達っていいなあと思った / 相手から「信頼できた」と言われうれしかった / 信頼することの楽しさがわかった、等
5. その他（11.9%）
 (例) 友達はこんな小さなきっかけでできるものだと実感した / きっかけがないとうまくいかない友達づくりもきっかけができてたくさんの友達ができた / 身体を使ったコミュニケーションは交流しやすかった、等

*アンダーライン部分は結果や考察中に引用している記述